

臨床宗教師の可能性は

可成り15.12.16

祈りと
震災

仙台でシンポ 現状と将来探る

東日本大震災を契機に始まった宗教者の公共的な活動を広く知ってもらおうシンポジウム「いま知りたい

臨床宗教師」が6日、仙台市青葉区の東北大であった。宗教の違いを超えて被

災者らの苦悩に寄り添う臨床宗教師の活動の現状や可能性を探った。

北海道東北臨床宗教師会と、臨床宗教師研修を担う東北大実践宗教学寄付講座が主催し、市民や医療、福祉関係者ら約200人が参加。基調講演では同講座の谷山洋三准教授が、被災者支援が端緒になった宗教師の成り立ちや、約110人の修了者が全国の病院や福祉施設で患者やスタッフら

に対応している事例などを紹介した。

宮城、新潟両県で活動する宗教師4人が志した理由や体験を発表。臨床宗教師会の高橋悦堂代表(36)「栗原市」は「生老病死に直面する医療、介護、福祉の現場や他宗教から学ぶことは多い。共に苦しむ人の支えになりたい」と話した。

石巻赤十字病院(石巻市)の鈴木聡副院長は医療者から見た臨床宗教師の可能性について述べた。「医学は生や死の根源的な問いへの答えを避けてきた。そこに向き合う宗教師は医療者を育てる意味でも必要。単なる技術ではなく、心が培われる」と期待した。

臨床宗教師を取り上げた河北新報の連載企画「挽歌(ばんか)の宛先 祈りと震災」を担当した村上俊記者(42)は「公共性を持つ宗教師は、宗教と社会が新たな関係を築く橋渡し役になり得る」と語った。

あすへ

東日本大震災



臨床宗教師をテーマに意見を交わしたシンポジウム